創世ホール通信No. 285

催し案内＋文化ジャーナル
2018年10月1日発行■北島町立図書館・創世ホール
電話：088-698-1100　ファクシミリ：088-698-1180
〒771-0207　徳島県板野郡北島町新喜来字南古田91

スマイル！元気！健康！フェア特別講演 寝たきりにならないための生活習慣 ～脳卒中の予防と血圧・血糖の管理～

10月7日(日)　午後1時～

会場：北島町立図書館3階　創世ホール

講師：河野光弘(こうのクリニック(藍住町)院長)
主催：スマイル調剤薬局（☎088-677-5388）
あわせて、2階ギャラリーで無料測定・お薬相談・食事相談・子ども調剤体験(要事前予約)等を講演会開場時間から午後4時まで開催。来場者先着300名までには粗品あり。

人形劇団べんべろべえ公演

10月25日(木)　午前11時～

会場：図書館2階　ハイビジョン室　無料

対象：就学前の子ども　赤ちゃんも大歓迎
内容：「バレリーナになりたい！」　ほか
主催：人形劇団べんべろべえ（兵頭☎088-698-6652）

日本民謡朝啄会 梅若啄志穂支部25周年記念大会

10月14日(日)　正午～

会場:北島町立図書館3階　多目的ホール　無料

出演：梅若朝啄(キングレコード専属・分家家元)
　　進藤聖子(二代目梅若朝啄)　　ほか
主催：梅若啄志穂支部(事務局　中川☎090-4332-7187)
■ご来場の方には記念品及び紅白もちを進呈。

第22回トラディショナル・ナイト ケルトの調べ ノース・アイル・タウン スリーラビリンス演奏会

10月28日(日)　午後2時半～

会場：北島町立図書館3階　創世ホール

入場料：前売/大学・一般　2,000円　小中高　1,500円
　　当日/大学・一般　2,500円　小中高　2,000円
演奏予定曲目：「ノース・アイル・タウン」「三羽の鳥」
　　「フォギー・ドュー」「ラスモア」　　ほか
出演：スリーラビリンス【坂上真清(ケルティック・ハープ)
　　みどり(フィドル)、藤沢祥衣(アコーディオン)】
主催：北島トラディショナルナイト実行委員会
日本屈指のケルティック・ハープ奏者坂上真清(さかうえますみ)氏が新グループを率いて4度目の創世ホール登場。坂上氏が、北島町にオマージュを捧げて作曲・演奏した話題のCD「ノース・アイル・タウン(＝北の島の町)」発売記念演奏会です。ご注目ください。

子育て支援 ファミリーコンサート

10月30日(火)　午前11時～

会場：北島町立図書館3階　創世ホール　無料

出演：徳島県警察音楽隊
対象：就学前の子ども　赤ちゃんも大歓迎
主催：北島町教育委員会（事務局☎088-698-9812）
7回目の開催となる子育て支援コンサートです。徳島県警音楽隊の皆さんによる、とても楽しい演奏会です。

文◎化◎ジ◎ャ◎ー◎ナ◎ル

故郷は地球

～脚本家・佐々木守がめざしたもの⑥

ＳＦ特撮研究家★池田憲章

講演採録●2007年２月25日●北島町立図書館・創世ホール

■「ウルトラセブン／勇気ある戦い」（佐々木守脚本、飯島敏宏監督）は、一人の男の子がすごく難しい手術を受けなくてはならないんですが、少年はやはり怖いわけですね。それでモロボシダンが、僕も手術の時に必ず駆けつける。だから君も勇気をもって手術に立ち向かってくれと。そのときにペダン星人という宇宙人がやってきて、戦わなくてはならなくなる。手術が始まりそうなんですけど、「ダンが来ないじゃないか。彼が来なければ僕は手術をしない」といって少年があらがうわけですね。ウルトラ警備隊のダンではなくて、人間と人間としてダンと僕は約束したんだ。なんでダンは来てくれないんだと言って。そこがいかにも佐々木守さんの本なんですけど。そこがまた「ウルトラマン」とは違う、実相寺さんと違って飯島敏宏さんと組んだ部分がはっきりと出ている作品なわけです。

■ところで実相寺昭雄さんがお好きな方は、「ウルトラセブン」では実相寺さんが撮った本数が少ないということに、お気づきになっていると思います。頭に「狙われた街」と「遊星より愛をこめて」を撮って、実相寺さんは京都に行かれてるんですね。京都で栗塚旭〔くりづか・あさひ〕さんが主演された「風」という時代劇が京都映画製作でありまして、実相寺さんと飯島敏宏さんがＴＢＳから派遣されて、これを撮っているんです。

■先ほど『戦国忍法帖』という佐々木さんの波瀾万丈のラジオ作品を紹介しましたが、ここでも佐々木守さんは飯島さんの要望に応じてですね、同じように波瀾万丈の話を書きました。主人公は、風の新十郎という大盗賊です。悪はどんな奴でも許さない、幕府側も盗賊も許さないという怪男児が出てくるんですけれども。それを追いかける小林昭二さんの同心が出てきて、それに、くノ一の土田早苗さんの忍者が絡むという、ルパン３世みたいな展開になるんです。

■その時に九鬼水軍〔くきすいぐん〕の残党と戦うことになるんですね。これは、飯島敏宏さんが監督された。川合伸旺〔かわい・のぶお〕さんというポール・ニューマンの声なんかをやってらっしゃって先ごろお亡くなりになりましたけれども、その方が九鬼水軍の隊長で、琵琶湖の岸辺で「出ませー」とか叫ぶと、いきなり湖の中から下忍の忍者が「一番」「二番」と言って、次々に水面から姿を現わすという（笑い）、忍者軍団との戦いを撮っていました。松竹のスタッフが「マンガですか？」と言った脚本でした。

■あるいは実相寺さんと組んだものでは、原保美が浮世絵師になってですね、美人画を描いて次々とモデルの美女を南蛮に売ってしまう。モノクロ作品なんですが、実相寺さんは筆を水の中に墨を落とすと、ぱーと広がってゆく。誰が見たって口紅の色なんですけど。モノクロなのにそういうことを平然とやってノリにノッて撮っていた。

■「風」というのは、実相寺さんにとっては物凄く重要な作品になるんですね。実は、京都映画というのは、大映の残党とか松竹の古い時代劇の京都の技師が集結していた会社なんですね。

■要するに美術のスタッフにしても、操演という移動車を押す人にしても、例えば溝口健二〔みぞぐち・けんじ〕とか衣笠貞之助〔きぬがさ・ていのすけ〕とかそういう名監督たちが鍛え上げた、いわば技師集団が、テレビ映画を作るところに集まっていたんですね。

■移動車にしても「直角移動」と、よく言うんですけど、溝口健二という人はこれにこだわった。道が直角に曲がっている場合、歩く人を撮影するときにカメラの移動車は直角にまがれませんよね。だから通常は「ループ移動」と言って、移動車のレールは、はじっこだけ丸くせざるを得ない、でもそうするとカメラは軌道が直角ではないから映像が変にならざるを得ない。それが納得できないので溝口健二は「絶対にダメだ、直角に曲がれる移動車を作れ」と。じゃあ、どうしたかというと、レールとレールを端っこで切るんですね。それで移動車にこういうケタを付けて、はじっこはどうするのかというと、スタッフが移動車をヨイショと持ち上げて直角に置き直す。手で渡して、直角に曲がってゆくという「直角移動車」ってのがあるんですよ。ほかにもベビー・クレーンというのがあります。移動車の上にさらにクレーンが乗っていて、狭い場所でも使える。移動しながらクレーン撮影ができるというものです。これも溝口さんたちが編み出したもので、さらに、列車の狭い通路の中で使える移動車とかがあって。そういうのを実相寺さんは、「風」で使いまくるんですね。

■実相寺さんはテレビ育ちですから、映画のスタッフってここまで出来るのかと。やっぱりドラマについて、もう一度ちゃんと取り組まなければダメだ、ということで、東京に戻ってきて手掛けるのが、「ウルトラセブン／第四惑星の悪夢」と「ウルトラセブン／円盤が来た」なんですね。

■要するに円谷のスタッフを挑発するわけですよ。「お前らにはできないだろ」と。「京都にはこんな凄い人たちがいるぞ。やってみんかい」みたいな感じで（笑い）、「ウルトラセブン」の後半２本「第四惑星の悪夢」と「円盤が来た」に取り組むんですね。実は、「第四惑星の悪夢」と「円盤が来た」の両方とも上原正三さんの脚本クレジットになってますけど、実はこれ分担して書いておりまして、「円盤が来た」を実相寺昭雄さんが書いて、「第四惑星の悪夢」を上原正三さんが書いているんですね。

■もともと「第四惑星の悪夢」は、「人間狩り」というタイトルでした。ソガ隊員とダン隊員が宇宙旅行に行ったら、軌道がそれて、ある星にたどり着く。現実だと思ったら、ロボットが人間を支配している氷のような管理社会だったという一種の寓話なわけですけども、映画の「アルファビル」をヒントに実相寺さんが映像を作り上げた物凄く虚無的な作品でした。

■道路を子どもが渡ろうとすると、車にはねられて、警察を呼ぶとロボット警官がやってきて（警察長官なんですけど）、「機械は、決められた通りに動いている。いい加減に歩いている人間の罪だ」と言って、全然、人間を認めないんですね。ロボット長官みたいなのが出てきて、例えばテレビ局でロケーションしてると、エキストラを何人か呼んでババババと銃で撃つと本当に死んでいるんですね。テレビ・ディレクターが「うーん、明日のエキストラは40人ぐらいにしたいねえ。バッと行きましょう、バッと」みたいな。「地球では本物は使わんのかね」と言います。

■結局、ロボットたちに管理されている人間の星での物語なんですね。それで、実相寺さんはシナリオを読んで「生原稿は読みにくいから、準備稿にしてよ」と、打ち合わせで金城哲夫に言って。ひょっとすると完成稿で直されるかもしれないと上原さんは思った。何しろ実相寺監督は佐々木さんとコンビを組んでいる方ですから。ダメかなあと思っていたら、「いいよ、これで」と言われ、殆ど直しがないまま、完成稿になるんですね。

■ところが映像の時に全く組み立て方が変わってくるわけですよ。ようするに地球だと思って、たどりつくと公衆電話があって、その受話器を持った瞬間に、魚眼レンズでの映像になって電話機が５メートルも先にあるかのような、ゆがんだ空間になるんですね。あるいは、ロボット警察の長官がやってくると、いつもガムを噛んでいて、マシンナイズのサウンド演出が加わり、それもカメラを胸のあたりに配置した魚眼レンズで撮られていて、人間を高圧的に見下ろしているような、ＴＶフレーム全てを人物が埋めている物凄く不思議な画面設計になっている。

■シナリオ通りなんですけど、実相寺監督の映像によって全く別の物語に見えてしまう。「この人凄いなあ」と、上原さんはびっくりしたらしいんですけど、そういう形で円谷ドラマ作品は進化していったわけです。

■それで、ここで新たな出会いが起こるわけです。実は「ウルトラセブン」というのは、後半のプロデューサーに橋本洋二さんがやってくるんですね。佐々木守さんを育てた橋本さんですけれども。前半は三輪俊道〔みわ・としみち〕さんという「月光仮面」を手掛けたプロデューサーがやられていて、後半の第３シーズンの助っ人として、橋本さんが登場するわけですけど、当然、先輩の三輪さんがやられた番組ですから、まあいいだろう、と。「ウルトラセブン」は許すと。

■次の「怪奇大作戦」のメイン・プロデューサーとして、橋本さんが金城哲夫達と打ち合わせをするわけです。「怪奇大作戦」というのは、科学犯罪―犯罪の中に科学的なトリックを使って罪を逃れようとする現代の悪―とたたかう科学捜査チーム《ＳＲＩ》（サイエンス・リサーチ・インスティテュート＝Science Research Institute）による攻防戦なわけですけど、金城哲夫たちの頭にあったのは、「スパイ大作戦」の円谷プロ版なわけですね。

■目に見えない透明マントを使って犯罪を犯す、あるいは人造人間みたいなものを使って犯罪を犯す。それを、「これは人間じゃない」と言って見抜く科学捜査チームの話だったわけです。でも、橋本さんは、どうもピンとこないわけですね。「現代の怪奇を暴く」というが、「現代の怪奇」は人間が溶けたり、燃えたりすることなのか、と。もっと本質的な、日本の現代社会の怪奇的な闇の部分があるのではないかと。

■それで橋本さんは、佐々木守さんを大変信頼している方ですから、明日箱根で、スポンサーの武田製薬と番組会議があると。どうしてもシナリオが欲しい。今、円谷プロから出ている台本では物足りない。それで佐々木守さんに依頼するわけです。「明日の朝一番までに台本を用意して欲しい。それを持って会議に行く。守、頼むぞ」と（笑い）。佐々木さんは橋本さんからの連絡を受けて、「こりゃ、いかん」と言ってですね（笑い）、必死になって、徹夜で台本を書きあげるのが、「恐怖の電話」と「死神の子守歌」なんですね。

■翌朝、そのシナリオをもらって橋本さんが目を通す。「恐怖の電話」というのは、第二次世界大戦が物語の背景にある。よく軍属が軍資金を隠すという話がありますけれども、小笠原の島のある場所に軍の資金を隠して、これは戦後みんなが忘れた頃に掘り返そうと。同盟を結んだ人達が秘密を抱えて日常生活を送っていて、あの島が返還されるぞ、いよいよ掘り起こすぞといったときに、電話がかかってきます。その電話を受けるのは桜井浩子さん演じるヒロインのお父さんなんですけど、電話の受話器からキーンと音がして、突然バーンと燃えて人間発火現象が起きる。電気信号の中に電話の受信機から殺人電波のようなものを出す科学犯罪をしている敵との戦いなんですが、根幹は、現在でも実は第二次大戦は続いているという視点なわけですね。一見平和に過ごしている今の日本の中で、第二次大戦は今でも続行中だというのが、橋本さんにはグッとくるんですね。「これだ。これならば現代の怪奇だ！」と。（次号に続く／採録・文責＝小西昌幸）